

「同心結」 中国経済新聞 080801 掲載

北京オリンピックの開幕まで、あと一週間。

前回開催地のアテネでは、競技施設の建設が遅れるなど、主にハード面での問題点を取りざたされたが、今回の北京をめぐるっては率直に言って、大気汚染の心配もさることながら、観客のマナーがもっと気がかりだ。禁止を無視したカメラのストロボや携帯の着メロ、相手国選手や審判への野次等々、これまで国際スポーツ大会で輦蹙（ひんしゆく）を買った言動が、五輪という場でくり返されるのではないか。中国国内でもこのところ、「外国選手が中国選手をおさえて優勝した場合でも拍手する」など、注意を喚起する発言が目立つ。

そんな中で、地道に準備が進んでいることがある。それが「同心結」だ。

十年前に開かれた長野冬季五輪の時、市民の国際理解と親善に役立てようと、開幕の二年前に、市内の小・中学校七十八校と参加六十一か国を特定して、「一校一国」交流活動が進められた。児童生徒は、これを契機に異文化や世界平和への関心が高まったし、相手国、特に小国の選手にとっては、思いがけない感激を生んだ。さらに相手国の学校との交流へ発展させている例も少なくないと聞く。「一校一国」活動は、その後の五輪にも引き継がれている。

長野関係者の熱心な勧めもあって、北京市は一昨年暮れまでに、市内の小・中学校二百校と、北京五輪参加国・地域をそれぞれ割り振り、相手国のオリンピック委員会との連携と同時に、相手国の言葉や文化の勉強、学校との交流も始めた。

北京の児童生徒がたいへんな関心を示し、この活動の名前も自分たちで考案した。その一つが「同心結」である（英語では、“Heart-to-heart” “Partnership Program”）。

各校は、相手国選手団のオリンピック村入村式に参加し、その国の言葉で国歌を歌うことから始まり、競技の応援、選手の学校訪問の受け入れなど、多彩な交流を進めることになる。ちなみに、日本を応援するのは朝陽区の花家地実験小学校。福田首相夫妻が昨年末に同校を訪問し、高崎の「片目だるま」を進呈して、「もう片方の目は五輪成功の時に入れましょう」と語って、児童たちを大喜びさせたという。

北京オリンピックのスローガンは「一つの世界、一つの夢（英語では One World. One Dream）。「同心結」活動もこの線上にある。子どもたちの可愛い声援が各競技場で響くなら、緊張した試合に彩りを添えるだけでなく、中国を見る海外の目にも新鮮に映るのではないか。

ただ、この種の企画によくあることだが、「形式倒れ」にならぬよう願うものである。